

黙示録の記録

第 16 章

最後の七つの裁き

著／ヘンリー モリス

訳／宇佐神 正海

第16章 最後の七つの裁き

七人の選ばれた天使たちは、創造主の最後の裁きの伝達者として任命され、準備されました。七年の患難期の後半は進行中で、創造主に反逆している人々も、なお創造主の個人に対する救いの恵みを受けることが出来ます。たとえそうでも、恵みに与かる者はほとんどいません。イスラエルの残りのものは荒野に逃げていき、獣の獰猛な粛清は進行し続けます。獣の印を焼き付けられるのを拒否する人々は、自分の命を守るために逃げますが、多くの人は捕えられ死刑に処せられます。長い干ばつと飢饉は、なお地球を苦しめており、食糧供給は決定的に不足します。これが黙示録16章で記録されている災害として進行中の世界の状況です。

溢れ出る怒りの鉢

七人の天使たちは地上にかつてない七つの災害をもたらす能力と権威を持っているだけではなく、彼らの巨大な鉢は創造主の怒りで溢れるほどに満たされていました。すなわち、その災害はもはや元来の罪の自覚

と回心の目的ではなく、聖なる創造主の純粋な正義達成のための復讐の現れでした。

黙示録 16 章 1 節 また、私は、大きな声が聖所から出て、七人の御使いに言うのを聞いた。「行って、神・創造主の激しい怒りの七つの鉢を、地に向けてぶちまけよ。」

天使たちは最後の進軍命令を伝えられます。

いわば、天の宮そのものから出てくる大きな声によって、地に対する創造主の最後の攻撃の合図が伝えられます。この声は創造主ご自身の声以外の何物でもあり得ません。黙示録 1 章でヨハネが初めて聞いたのと同じ大きな声です。それは栄化されたキリストの声であり、怒り心頭に達しているキリストの声です。キリストは再三、許しと救いを提供して恵みと愛をもって人に語ってこられました。ついにキリストの怒りの杯は満ち、溢れ出たに違いありません。

創造主の御怒りをもはや差し止めることはできない。それ以上遅れることなしに怒りの鉢は注ぎ出され、恐ろしい災害が地を群がり襲うに違いありません。なお、各々の災害は、各々それ自体人々にとって命取りになる痛みを伴うものであるけれども、なおそれ自体の特別の目的を持っています。各々の鉢は適切な順序で注ぎ出されなくてはなりません。そして、七つすべての次第に増加する効果は、遂に人の反逆を地から完全に清めます。

黙示録 16 章 2 節 そこで、第一の御使いが出て行き、鉢を地に向けてぶちまけた。すると、獣の刻印を

受けている人々と、獣の像を拜む人々に、ひどい悪性のはれものができた。

最初の天使が、自分に委ねられた満ち溢れる鉢を持って天にある宮から出てくるとき、鉢をそこかしこに傾け、地球のすべての地に、鉢の苦い内容物が万遍なくばら撒かれるように、速やかに地をとびかけます。最後に鉢は空になり、混ぜ合わされた恐ろしい鉢の中味は、その使命を終えます。

その役目は、いたるところの人々（男女を問わず）の身体にぞつとするような痛みを伴う伝染性の腫瘍をもたらします。この病は堪え難い潰瘍（ただれ）として出てきます。皮膚をむしばみ、見るからに悪性で、医療の限界に挑戦するように思われます。

おそらく、これらの炎症は今まで経験したことのない、従って病名も付けられていない腫れもので、記述によつてこれらのただれの正確な特質を明確には述べ得ないのです。これら疾病の最も驚くべき側面は、これらの疾患は、（創造主のしるしを受けていた人々にラッパの裁きが影響しなかったように）、獣のしるしを受けることを拒否した人々には影響がなかったということです。

確かめることは不可能ですが、人がこのしるしを受けた過程こそ、たぶん人々がこれらの無比の腫れ物に犯される原因でしょう。そのしるしは変わることなく入れ墨のように皮膚に取り付いていました。化学薬品に含まれるある種の物質、または印をつける過程（おそらく、何十億もの人々に政府が素早く変わることのない印をつけるために用いた放射能の放射によって）で血流に入り込むかも知れません。災害をもたらす天使は、この毒の特性を知っていて、大気中にある他の力（もの）を解き放つことができ、それが、印を受けたすべての人の身体に特に速やかに反応を起こし彼らの体にこれらの「むかむかするほど嫌な突き刺す

ような痛みを伴う」腫れ物を生じさせるのかも知れません。

この災害は、以前の災害の幾つかのように三分の一の人々には影響を及ぼさないが、獣の死に至る印を受けたすべての人に確実におよびます。彼らは真の創造主であり創造者であるイエス・キリストを礼拝することを拒否して、むしろ獣の大いなる像と全世界に置かれた複製品を拜むことを選択したので、「さばきの時」が彼らに來たのです。彼らは獣の印によつて獣と同じと見るべきでしょうか。そのときに、創造主はご自身のしるしを彼らの身体につけ加えて、彼らの不快を催す外観によつてむかつく腫れ物は、彼らが好む人間中心の神の性質を本当に反映しているのでしょうか。獣礼拝を拒否して耐えなくてはならない迫害を恐れたのでしょうか。それから、創造主が彼らにもっと激しい苦しみをもたらすはずです。その苦しみの激しい痛みはやがて来るはずの苦しみの一つの痛みに満ちた保証に過ぎません。この時点から、獣のしるしを受けた人は誰も彼が選んだ恐ろしい選択の結果を永遠に忘れることはできないでしょう。

そして、このすべてはこれらの裁きを彼らに与えておられる主イエス・キリストに対しなおも彼らを激怒させるだけでしょう。彼らが主イエスを直接害することはできないので、彼らの怒りは、非常に苦々しい感情を表に出し彼らのようにまだ禍にあつていないこれらの人々にぶちまけられるでしょう。社会的圧力、仕事の圧力、知的圧力のような強大な圧力がこれらすべてに影響を及ぼし彼らをして群衆に加わり死のしるしを受けるために彼らを説き伏せたことでしょう。これ等のものさしが役に立たないとき、もし彼らが服従しないなら、彼らは即座に追い詰められ、逮捕され、審問され、死刑が執行される。

それゆえ、世界史でのこの最も悪い迫害の期間、すべての試練のうちで最もおおいなる試練のなかからさえ、信者の大群衆がくるというのは驚きです。彼らは、獣のしるしを受けることjを拒否した小羊の血によつ

て贖われた人々です（黙示録7章9〜14節）

黙示録16章3節 第二のものが、その鉢を海に傾けた。すると、海は死人の血のようになって、その中の生き物がみな死んでしまった（口語訳）。

黙示録16章3節 第二の御使いが鉢を海にぶちまけた。すると、海は死者の血のような血になった。海の中のいのちのあるものは、みな死んだ。

第二のラッパの裁きのもとで、海の三分の一が血となり、海のすべての生き物のうち三分の一が死んだ。このことは大きな燃えている山の落下の結果であつた（黙示録8：8、9の検討を見よ）しかし、今や海のすべてが血となり海にいるすべての生き物の三分の一が滅ぶのです。

前の場合、地の毒で海が有害になることは、海にある種の大きな彗星または隕石の突入によつて達成された。おそらく、同じような現象がもう一度惹き起こされますが、今回はもっと大きなスケールです。ただ一つの「燃えている山」の代わりに、群がるこれらすべての天体が地球を攻撃するのです。世界中の海洋すべてを台無しにし、すべての水を血のような色にし、有害なものにします。もしそうなら、創造主の怒りを天使が海に注ぎ込む比喻として実に相応しいのです。

このような天体の爆射が特に述べられてはいませんが、ある種の水の変質を意味しているのかも知れませんが。化学的に言うと、海水の組成はほとんど血の組成と同じである。このことを思い出せば、比較的小さな修正が必要なだけなのです。もちろん、人の血管を流れている血の赤い色は、赤血球の色素（ヘモ

グロビン)によるのです。その成分の大部分は鉄です。生きている生き物では、これら赤血球は酸素と他の構成物質を体のすべての細胞に運搬します。したがって、実を言えば「肉のいのちはその血にある」(レビ17:11)のです。海水が生きている肉体の血の代わりにはなることは決してないけれど、この場合海の水が死んだ人の血のようになったのです。海水は化学物質の溶解状態に過ぎず、鉄とその他の化学物質を含んでおり、見かけ上それが血の色をしているが、そこには最早いのちはありません。事実、それは海にいるすべての生き物に死をもたらすのです。

地球上の広大な海洋の水に致命的変質を生じさせるような化学変化が実際にどのように起こったか私たちは知らないが、それに化学者たちは理論的な考察を提供できるかも知れない。しかしながら、確かなことは、「水の天使」は近代の有機化学者のだれよりも水の化学についてより詳しく知っているし、実際に、このような反応をうまく生ぜしめ、地球の大きく広い海が死をもたらす溶液で満たされるまで維持できるのです。その溶液は見たところ人の死体にある有害な血のような化学物質を持っているのです。

この有毒な海洋では何物も生きることができず、すぐに数え切れないすべての魚と海生哺乳類と海生爬虫類と無数の海生無脊椎生物が減びます。こうして、更に遙かにひどい海洋との有毒化と世界中の海岸の汚染が続きます。海洋は地球の物的経済に長く続いた機能を効果的に果たして、死にます。創造主が水に住むあらゆる生ける魂を創造されたように(創世記1:21)今やすべての生ける魂は海で死にました。

新しい地球にはもはや海もない(黙示録21:1)、こうしてもはや海の動物もないのです。現在の世界では、海の生物は、世界の大いなる食物連鎖の土台を準備し、少なくとも洪水後の海洋自体は、地球になくはない水の循環の頼みの綱である。しかし、これは新しい地球では不必要である。そして、明らかに千年期の

の地球はかなりの度合いで古い地球と新しい地球の特徴をある程度混ぜ合わせた新しい地球の原型のほずである。

過渡期は地球とその住人たちにとってひどい外傷となるでしょう。創造主の真の存在を知っている人々が創造主としてキリストをあがめるのを拒否し、創造という大いなる贈り物(ロマ1:20)を感謝しないとき、創造主はついに彼らを放任された(ロマ1:24)、したがって被造物自体彼らに刃向います。海とそこに住む生物はかつていのちの泉でした。しかし、今や海は膨れ上がった死の水溜りとなっています。

黙示録16章4節 第三の者がその鉢を川と水の源に傾けた。すると、みな血になった。(口語訳)

黙示録16章4節 第三の御使いが鉢を川と水の源にぶちまけた。すると、それらは血になった。

海洋をだめに(有害化)することは、それ自体人の水供給を破壊するものではない。なぜなら、水文学的水の循環は世界の川や泉での新鮮な水を維持するためにお機能しているのです。しかしながら、水の循環自体は、患難期の前半で正常な機能を果たさなくなっていた。創造主の二人の証人が雨を差し止め(黙示録11:6)、風の天使は大気の動き止めて(黙示録7:1)いたように。少なくとも、ある程度、水の循環はその活動が続いていた。二人の証人の使命が終わったとき少なくとも雹が降り注いだように(黙示録11:19)

少なくとも旱魃(日照り)の短い終わりがあった可能性があり、それには激しい雷雨や雹のかたちできて、こうして枯渇した流れや地下水位を再び満たすのに役立つはずで、水の貯蔵庫は部分的に再び満たされます。海洋からの蒸発は有害な溶質を取り除き、こうして、降雨は純粋な水になるはずで、川や泉はこの時再び

新鮮な水で満たされるのかも知れない。

しかし、今第三の天使「水の天使」が来ます。彼の怒りの鉢がすべての川と泉に注がれ、それらの水も血になります。この度もこの変換を導くのに宇宙からの群がり落ちる粒子によるか水と生物または境界領域にある物質との彼らとの接触によって惹起されたのかわからないが、この力ある水の天使がそれを完遂出来ると確信できるのです。

川と泉の水はたとえ血の組成にうまく変換されるとはいえ、明らかに海洋の水のように有毒にはなりません。なぜなら人々がそれをなお飲むことが出来るのですから、(6節)。その水は苦くともいやなものですが、おそらくさらに処理をすれば飲めるように出来るのです。新鮮な水は降ってくる雨をとらえる水槽を用いて引き出され得るのです。せいぜい、人類の生存を今までになく困難にするくらいでしょう、すべての水が血になった時に。

黙示録 16 章 5 節 それから、水をつかさどる御使いがこう言つのを聞いた、「今今し、昔いませる聖なるものよ、このようにお定めになったあなたは、正しい方であります。(口語訳)

黙示録 16 章 5 節 また、私は水をつかさどる御使いがこう言つのを聞いた。「常に今し、昔います聖なる方。あなたは正しい方です。なぜならあなたは、このような裁きをなさったからです。

人はいらだち泣き言を云うかも知れない。彼らが自分のなした行為の報いを受ける時、しかし、創造主を真に知っているすべての人は、地球全体への大いなる裁きは完全な正しさを維持するために不可欠な行為で

あることを強力に知らされるのです(創世記 18…25)。

事実創造主がなされることは義の定義そのものです。確かに創造者に対する激しい不満と恨みの叫びがあるでしょう。人が生き残るために血を飲まされるとき、そしてこれらの非難の応酬は冒瀆のことばを織り交ぜるでしょう(9節)しかし、不平は悔い改めではなく、したがって彼らに何の役にも立ちません。

力ある天使は、水にこの不思議な反応を起こさせるため必要な理解を持って創造主に用意され、このような災害の正当性を明らかにわかっています。彼は大きな証をし、章栄を創造主に岸裁きの実に適切であることをあらゆる賛美のことばをもって栄光を創造主に帰します。..墮落した人びとや墮落した天使たちのように、罪と利己主義によって盲目にされていないで、彼は力ある創造主と裁き主を理解し称賛することができます。

そして、ヨハネは彼の証を聞き、彼が聞いたことを私たちに知らせたのです。それはすべてのひとが聞き、心を燃やす必要のある証です。創造主は義なる創造主であり、彼は完全に正しいやり方で不義なるものを裁かれます。

創造主はまた慈悲深い創造主で、創造主は人の邪悪さを喜んで許します。しかし、邪悪な者に対する厳しい刑罰がすでに要求されていた。そのとき創造主の御子がいけにえの小羊として創造主をなだめる身代わりとして死なれたのです。しかし、人が創造主が清いとされた犠牲の血の契約を軽蔑し続けるなら(ヘブル 10…29)、罪のためのいけにえはもはや残されてなく(ヘブル 10…26)、創造主の聖なる御怒りが放出されなくてはなりません。

義か哀れみかによる特別な赦しのような区別はありません。創造主はかつて居られ、今居られやがて来、

られる方です。「イエス・キリストは、昨日も今日も、いつまでも、同じです。」（ヘブル13:8）救われた人は常に義と判断され恵みによって救われ、恵みを拒否する者は不義とされることを選んだことになります。創造主はしばしこの選択を許しますが人々はこのようなバカげた選択の最後の結果を覚えるべきです。創造主は嘲られる方ではありません。

黙示録 16章 6節 彼らは聖徒たちや預言者たちの血を流しましたが、あなたは、その血を彼らに飲ませました。彼らは、そうされるにふさわしい者たちです。

聖徒と預言者たちの血を流した者たちに、血をお飲ませになりましたが、それは当然のことでもあります。創造主の復讐の特別な正義が、「創造主の刑罰の特別な性質で証言されます。人々は、贖いのために流された小羊の血をさげすむだけでなく、彼らはキリストの聖徒たちや預言者たちの血をも流したのです。

小羊（キリスト）が贖いのためにご自身の血を差し出されたから（黙示録5:9）、永遠の相続財産を受け継ぐ方としてふさわしいと賞賛されているので、したがって、今度はこの方を拒む人々は悲惨な状態でさらに二三日生き延びるために偽りの血を飲むのに相応しい者として保たれます。彼らは正しい者の血を流すのに躊躇しなかったので、今や彼らは裁きの血を飲まなければならないのです。

たとえば多くの者はキリストの血を流すのに直接関与しなかったとしても、彼らは身代わりによってなしていたのです。獣が創造主の二人の証人を最後に殺した時（黙示録11:10）、地に住む人々は喜んでいた。そして、獣が、彼の像を拝まないすべての者を滅ぼすとのペンペンを始めた時、抗議の声を上げなかった。

それはいつものことであつた。無力となったユダヤ人の宗教指導者たちは、イエスの十字架刑を要求した時、いさぎよく彼ら自身に釘を打ち込み、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってよい」（マタイ27:25）と叫んだのです。続いてすべてのユダヤ人がそのように云ったのです。主イエスは、御自身が来られた時代の人々が以前時代の正しい人々の血の責任を負うことになると言われたのです。「それは、義人アベルの血からこのかた、神殿と祭壇との間で殺されたバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上で流されるすべての正しい血の報復がおまえたちの上に来るためです。」（マタイ23:35）。

死刑に対する正しい憤りにひるみ人々、そして殺人の罪と戦争の恐怖を非難する人々は、それにも拘らず、イエス・キリストと彼の恵みのことばを拒否するなら、血を流すことに関する創造主の目から見ても、有罪であつた。彼らは「またはや創造主の御子を、彼ら自身のために十字架につけて、さらしものにする・・・」（ヘブル6:6）のです。クリスチャンであると言いながら、心に知れる罪を持ちながら主の晩餐に与る者は「主のからだと血に対して罪を犯すことになります。」（1コリント11章27節）

同様に、キリストの証人たちが嘲られ、拒否され、口封じのために殺される時いつでも、黙認する者―黙っているだけでさえ、事実上迫害者の態度を表すことになるのです。キリストがご在世の時代、最も強い印象を与える教育を受けた宗教家に対して、イエスは言いました。「わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは人々から天の御国をさえぎっているのです。自分も入らず、入ろうとしている人々をも入らせません・・・『私たちが、父祖たちの時代に生きていたら、預言者たちの血を流すような仲間にはならなかっただろう』と言います。こうして、預言者を殺した者たちの子孫だと、自分で証言しています。おまえたちも父祖たちの罪の目盛りの不足分を満たさない。おまえたち蛇ども、まむしのすえども。おまえたちは、

ゲヘナの刑罰をどうしてのがれることができるか」(新改訳マタイ23章13節、30〜33節)

または、「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざである。あなたがたは、天国を閉ざして人々をはいらせない。自分もはいらぬし、はいるとする人をはいらせもしない。．．．『もしわたしたちが先祖の時代に生きていたなら、預言者の血を流すことに加わってはいなかっただろう』と。このようにして、あなたがたは預言者を殺した者の子孫であることを、自分で証明している。あなたがたもまた先祖たちがした悪の柙目を満たすがよい。へびよ、まむしの子らよ、どうして地獄の刑罰をのがれることができるか。」(口語訳マタイ23章13節、30〜33節)

多くの荒々しいものが、昔も今も信者と証人の迫害者になっているが、誰一人この終わりの時代の獣によって管理された人々のように世界的規模で根気強くなされたものはないのです。それゆえ、この終わりの世代の人々は、彼らが流して大喜びしている血を余儀なく飲まされるはめになるとくに当て嵌めています。彼らは特にそれを受けるに値する者たちです。

黙示録16章7節 また私は、祭壇がこう言うのを聞いた。「しかり。主よ。万物の支配者である神・創造主よ。あなたのさばきは真実な、正しいさばきです。」

この裁きを実行する天使だけがその正当性を立証するものではありません。ヨハネはすぐに他の声が同じ証を宣言しているのを聞きます。この声は誰かを同定できませんが、同じ天使の声とは思われません。天にいる他の各々の天使は、水の天使の証に「その通りです」と言えるのは確かです。したがって、祭壇の脇にい

る知らされていない天使が是認のことばを読んでいるに違いないはずす。

事実、写本の幾つかは、実際に“another out of”という言葉を欠いており、したがって本文は「祭壇が言うのを聞いた」と読めるのです。明らかに物質である祭壇は話せませんが、祭壇の下にいる大群衆から湧き起こった大きな声を象徴していると取ってよいでしょう。そしてそれはヨハネに祭壇自体から発している「他の声」を実際に聞いているかのように響いたことでしょう。

黙示録6章9〜11節で、ヨハネは、患難期の初期の殉教者の魂が祭壇の下にいるかのように書いていました。彼らは、創造主が彼らの血の復讐をして下さるように懇願して、「大きな声で叫んで」いたのですが、もう少し休んで待つように告げられていたのです。

その時から患難期の終りの迫害に到るまで、血を流された多くの人々が加えられて、彼らの数は大いに増し加えられてきました。最後の一連の創造主の裁きが地に注ぎ出される時、彼らの舞い上がるような興奮を人は容易に想像できます。それから、彼らが潰瘍、川、や泉が突然血の色に変わるのを見る時、どこにいても常に地上にて彼らの血を流した人々を思い出します。祭壇の下で待っている魂も気持ちを抑えることが出来ません。天の祭壇の下で彼らが休んでいる所から立ち上る大きな叫び声と合わさって、「長く遅れていたけれど、創造主の裁きが遂に来る時、それは真実で正しい裁きとなるのです」。

大いなる裁きについて記す適切な名は、彼らがガラスの海でうたったように(黙示録15章3節)、またケルビムが叫び続けたように(黙示録4章8節)「全能にして主なる創造主」です。黙示録1章8節で、最初にご自身を「創造者である主、今いまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者」と紹介しています。他のすべてのところ(黙示録4:8、11:17、15:3、16:7、19:6、21:22)では、ただ単に「主、創造主、万物の支配者」「主、

創造主、全能者」(ギリシャ語と同じ)と称賛して読んでいます。有て有る方であるので、その裁きとその道は、主の裁きは真実であつて、ことごとく正しい(詩19:9)。

黙示録16章8節 第四の御使いが鉢を太陽に向けてぶちまけた。すると、太陽は火で人々を焼くことを許された。

これまで、災害のすべては地球とその環境だけを狙ってきました。けれども、創造主は地球と同様に太陽をも所有しています。創造主は太陽を造り、御自身が望むがままに用いることが出来ます。実のところ、創造主は天と地との中にあるすべてのものの創造者です(黙示録10:6)。

太陽は地球の一部ではないが、太陽は地球のために働きます。太陽は特に「地を照らす」ために、そして、「しるしのため、季節のため、日のため、年のために」創造された(創世記1章14、15節)。実際に太陽は人のための素晴らしく役に立つものです。そして、地上の物理的・生物学的過程すべては、そのエネルギーを究極的に、太陽から引き出しているのです。「太陽は、部屋から出て来る花婿のようだ。勇士のように、その走路を喜び走る。」(詩篇19章6節)。

しかし、太陽は、「世界の光」(ヨハネ8章12節)と象徴されている主イエス・キリストのようにしもべであると同時に敵ともなります。そのとてつもない力を燃えさかした状態にすることも破壊することも出来ます。そして、今や裁きの時です。根もまたは実をもたない植物がそれらがどのような状態にあるかを表します。「しかし、日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。」(マタイ13:6)

風の天使、水の天使がありました。そして今や太陽の天使が出て来ました。この天使に、創造主は太陽の発動機に大エネルギー変換過程を起こす働きを任せられたのです。(熱核融合の過程を通して働く原子燃料によるとかつては納得していた科学者たちも、今や、いろいろな理由で曖昧な態度を取っています。すなわち、熱核融合を除いて、実際の重力減少や化学的燃焼過程による証拠の重みは、太陽の年齢が進化論のためにはあまりにも短いことを今や強く示唆している。)究極の燃料が何であるにせよ、この天使はその過程の構成要素すなわち加速したり、減速する方法を理解しており、こうして地球を熱することも冷やすことも出来るのです。

天使が太陽に向けてその大きな鉢の中味を注ぎ出した時、太陽はものすごい熱さに暖められ、太陽から発せられる大変な熱量は、地球に焼け付くような熱波を注ぎ込みます。旧約聖書の最後の章に預言者マラキは「万軍の主は言われる、見よ、炉のように燃える日が来る。その時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらのようになる。その来る日は、彼らを焼き尽して、根も枝も残さない。」(マラキ4章1節)と書いた。イザヤは「それゆえ、のろいは地をのみつくし、そこに住む者はその罪に苦しみ、また地の民は焼かれて、わずかの者が残される。」(イザヤ24章6節)と説明している。

これは、恐らくイザヤが書いた時のことでもあると思われます。その時イザヤは「さらに主がその民の傷を包み、その打たれた傷をいやされる日には、月の光は日の光のようになり、日の光は七倍となり、七つの日の光のようになる。」(イザヤ30章26節)と云っている。太陽から来る通常の7倍もの光を月が反射するので、夜は昼のように明るくなるのです。

地球の住人たちは、このようになおもさらに苦しませられます。燃えさかる熱は、それ自体実に厄介なも

のですが、彼らの皮膚にある潰瘍性疼痛の上に置かれた炭火のようになるのです。さらに、夜には少し緩和しますが、休んだり寝ることは出来ません。ある人は空調設備のある建物に引きこもることが出来ますが、恐らくこれらの建物は、部分的で短時間の恩恵を提供するだけです。水の供給は重要で、実に極めて重要な用途、それから費用のかかる浄化装置に割り当てられるに違いありません。全体の状況は、外傷と発狂状態となり、誰も最早合理的に考えるさえ出来なくなるのです、

さらに、強烈な太陽の放射熱は、潰瘍やその他の水の表面から実に大量の水を蒸発させ、海的水位、と地下水面を低くします。たとえ風の天使たち（黙示録 7 章 1 節）が、最早風を差し止めなくても、まもなく、地上何処でも温度は絶えず熱くなり、本質的に、水の通常の循環作用を抑制します。こうして、水蒸気は次から次へと空中に留まり、温室効果を高め、大気の移動をさらに弱めます。地表に近づくにつれ飴や霰はおそらく激しい雷雨や竜巻塊の形になり、地球をもつと悲惨な状態にします。

一般に水位の低下は、特に大きな大陸棚や大陸棚斜面にそって、陸地をより不安定な状態にします。それらはそうでなくても大洪水後の大陸隆起以来、ずっと何か不安定な状態に置かれているのです。海面下に広がる広範な沿岸の地すべりは、時折起こっていて、沿岸都市に大損害を齎すだけでなく沿岸を襲う壊滅的津波を生ぜしめるのです。

けれども、太陽の激烈な熱は、また、少なくとも、しばし海洋の蒸散を幾分埋め合わせるといふ別の効果をもたらしめます。即ち、グリーンランドや南極大陸の大氷原の水が融けます。では、これら巨大な貯蔵所に十分な氷が蓄えられているのでしょうか。もしそれらがすべて融解すると世界中の海の海準を 200 フィート（約 61 m）上げると見積もられています。

全世界の温室効果が化石燃料の燃焼によって増加されているので、このような融解は現在の環境下でも差し迫った問題です。蒸散によって海面の高さが下がる前に、氷床が融けることもあり得ます。こうして、第四の怒りの鉢の最も直接的水理学的効果は、海面水位の急速な上昇をもたらし、それに続いて既に示唆されている海面水位の沈下が起こる。

この現象は聖書の他のところで確かに暗示されています。「主は水をパンくずのように投げつける。：主が、みことばを送って、これらを溶かし・・・」（詩篇 147:17, 18）。「あなたは雪の倉にはいったことがあるか。ひよりの倉を見たことがあるか。これらは悩みの時のため、いくさと戦いの日のため、わたしがたくわえて置いたものだ。」（ヨナ 3 章 2, 23）。後の聖句の倉は、倉庫と訳しても良い。したがって、この節は雪や粟の巨大な貯蔵庫に対する言及で、悩みの時（患難期？）のために蓄えられているのです。

またアモス 9 章 5, 6 節を考えてみてください「万軍の神、主が地に触れられると、地は溶け、その中に住む者はみな嘆き、地はみなナイル川のようにわきあがり、エジプトのナイル川のようにまた沈む。主はご自分の高殿を天に築き、大空の基を地の上にすえ、海の水を呼んで、地のおもてに注がれる。その名は主となえられる。」

聖書を書いた人々は、おそらく水で出来た大氷原を見たことはまったく、したがって、聖書の他の箇所のように自国語で経験したことを書くことは出来なかったはずだけれど、このような参照箇所は、世界中の海沿いの地を裁くに当たって海の水を注ぎ出すために主がいつの日か融解し送り出す、遠く離れた雪の倉庫について謎のように言及していると取ることが出来ます。

事実、もし巨大な氷冠が一日で突然融けると世界中の大都市（ニューヨーク、東京、ロンドン、ロスアンジェ

ルス、リオデジャネイロ、ブエノスアイレス、アムステルダム、レニングラード、ローマ、アテネ、ベイルート、カルカタ、上海、シンガポール、香港、やその他多数）が水浸しになり滅んでしまします。これら大きな沿岸のフナ係出来る主要都市は、腐敗と不道德の悪名高いセンターでした。そして、特にそれら集合体の中からクリスチャンたちが携挙により天に移された後では、創造主の聖なる裁きの対象としてふさわしいはずでず。

黙示録 16 章 9 節 しかも、彼らは、これらの災害を支配する権威を持つ神・創造主の御名に対してけがしごとを言い、悔い改めて神・創造主をあがめることをしなかった。

再び、人の性質についての悲劇的説明。地上に住む人は、地球を苦しめている打ち砕くようなこれ等の裁きが不快な創造者である主からのものであることを、もはや誰一人疑うことは出来ない筈です。しかし、彼らは、二つの悪の連合、獣と偽預言者と共にいる年を経た竜が、何とかして創造主を退け支配権を奪うことが出来ると信じるのです。

なぜなら彼らは救いに至る真理を愛することを拒否したので、彼らは、致命的な欺瞞に追いやられ、途方もない嘘を信じるのです（Ⅱテサロニケ 2 章 10 節）。地上にある恐ろしい疫病も身体を打ちたたき苦痛さえ彼らを悔い改めさせることは出来ません。創造主だけが災害を取り去ることの出来る方であると知りながら、それにも拘らず、彼らは創造主の聖なる御名を無視し穢し事を言い続けます。罪で暗くなった精神、圧政的な悪い霊の恐ろしい塊によって狂わされ、麻薬に手を出し、荒廃した環境と今や激しい痛みと熱、彼らが考えら

れるすべては創造主に対する憎悪である、そして彼らがこの期に及んでも彼らを創造主の力と裁きから彼らを救い出すとなお信じている最後の対決に向かって進んで行き、彼らが愛する邪悪な状態で生きようように彼らを解放するのです。

黙示録 16 章 10 節 第五の御使いが鉢を獣の座にぶちまけた。すると、獣の国は暗くなり、人々は苦しみのあまり舌をかんだ。

主都バビロンにおける安全性、獣自身と側近の仲間の安全は、これまで多くの人が経験した最も悪い災難をも、少なくとも事なく過ごせました。人為的と魔術的最高の医療処置、手に入れられる最高の食糧と水、空調設備の伴う宮殿、背後には強力な軍隊と難攻不落の城壁に守られて安全、獣と彼の預言者たちは、奴隷状態にし統合する地球規模の覇権を主導し続けます。かつてない太陽光と月の光さえ、彼らに感銘を与えないで、彼らの非道な主人が自分自身を力ある光の天使で、もし彼の目的に遭えばこのような軌跡を再び行い得ると固く信じているのです。

しかし、今、第 5 の怒りの鉢がぶちまけられます。今度はその中味が獣自身の御座そのものに注ぎかけられます。その結果厚い闇が獣の御座のある部屋からはじまり、宮殿に立ち込め、その他の行政の建物に広がります。そして最後に豪華な都市の全域のどこにも重々しい闇が昼も夜も満ちますまで、主都全体を覆います。

世界中のすべての地域で太陽の光が 7 倍になっていて、しかもその地理的中心にあたる所で、どのようにしてこのように厚い闇の地域を作り出せるのか、特に光を通さない真つ暗闇があること自体謎です。パロの

時代のエジプトで、悪霊につかれた魔術師たちモーセのある奇跡をまねることが出来たが、彼らの魔術は、エジプト人とイスラエル人との間をを分ける超自然的闇を作り出すことは出来なかった（出エジプト10章21、23節）。恐らくある種の入ってくる光を総て反射する目に見えないエネルギー防壁が、都市をぐるりと取り巻いて組立てられたるでしょう。

この著しい現象の生じ方に拘わらず、創造主の権威を憎む獣にとってさえ、その防壁は驚くべき証となります。枯れも彼の主人ルシファーも住まいに光をもたらすことは出来ません。その年の外側の世界は創造主からの焦がすような太陽光で目がくらむくらいに明るいのに、獣の王国は真つ暗やみです。このように明らかな霊的比喻は、地上に住む人々の目を逃れることは出来ません。彼らは創造主は光であり、サタンは闇であることを無論知っています。それにも拘らず、人々は、彼らの行為が悪いので、光より闇を愛します（ヨハネ3章19節）。

学者のある人は、獣の首都に限定した闇と云うよりも全世界に及んだ闇と解説するのを好みます。聖書は鉢が獣の玉座に注がれた時、やみが彼の王国を覆ったと述べています。最初の鉢が地に注がれた、第2の鉢は海に、第3の鉢は川河に、第4の鉢が太陽に注がれたのです。もし第5の鉢のやみが、全地球を覆う事を意図していたなら、それに関する言葉の用い方は、ただ獣の御座にというより地上に注いで、鉢の中味が空になるようにする必要があると思われます。

実は、「獣の国」は全世界に対してではなく、ただ獣の特別な国・土台について言及していて、その土台から彼が後に他のすべての国々の支配権を得るのです。獣の国際的背景と彼の元来の王国の正体は、長い間聖書注釈者の間で論争の問題でした。ローマ、ギリシャ、シリア、アッシリヤ、ロシア、アメリカ合衆国、と

その他の国々はみなその候補に挙がってきたのです。事実、今の時点でその国はどこかその正体を決めることは不可能です。聖書は特に「その時になると、不法の者が現れる」（Ⅱテサロニケ2:8）と述べています。これが起こる前に多くの出来事が起こらなければなりません。その中で最も大切な出来事は、キリストが地球の大気圏に帰って来られた時の死者の甦りと生きている聖徒たちのです（Ⅰテサロニケ4章16、17節）。恐らく、それは悪しき者が彼らの中から起こる前にその王国とその民に帰する汚名を避けるために、（既に出版されている非常に多くの推測によって起こる出来事が実に多く証明されている）聖書は意図的にこの問題を明かされないままにしているのです。

彼はどこからでも来ます。彼が世界支配をした後、彼はバビロンに壮大な世界首都を建てます（Ⅰ7、18章の検討を見よ）。その中心に彼の玉座が据えられ、超自然的闇が覆ったのもそこです。この時点で、彼の王国の広がりがどこまでであろうと、（彼が支配している総ての王国とは異なつて）闇は主都の中心に特に集中するでしょう。闇はそこよりいくらか範囲を広げるとしても、文脈上、闇が全世界に広がることはないようです。

いずれにせよ、創造主こそ創造者であることが、もう一つの非常に強力な証拠となります。獣の支配は、見た目には印象的で、その広がり地球全体ですが、キリストが最後に地上に御国を確立する時、その支配は間もなく忘れ去られるでしょう。

現在創造主の御名に対するけがしことを言っている舌は、間もなく沈黙させられます。この時でさえ、彼らがこれらの同じ舌で、痛みでうめいている間、彼らはまともに不敬なことを述べる事さえできないのです。ひどく嫌なはれものと苦い水での苦しみ、燃えるような暑さとそれに続く重苦しい闇はおおくのひとにとつ

て、耐えがたいものとなり、齒ぎしりし、舌を噛みます。

黙示録 16 章 11 節 その苦痛とでき物とのゆえに、天におられる創造主をのろった。そして、自分の行いを悔い改めなかった。

あらゆる痛みとトラウマにも拘らず、ほとんど信じられないくらいにけがしごとの悪口（毒舌）が続きます。創造主を敬わない人々が死後悔い改めて信じる第2のチャンスがあり、そして、地獄の苦しみ（又は煉獄）が、彼らを悔い改めに導くかもしれないと信じている人々が今日若干います。けれども、この節はこのような考えを誰ひとり持ちえないことを確かに伝えているのです。

第一の鉢が注ぎ出された時、はれもので苦しんでいた人々が第5のはあ地の後も同じはれものでなお苦しんでいることにも注意して下さい。これは歴史的解释の明らかな繰り返しです。歴史的解释はこれらすべての鉢をキリスト以降の数世紀にわたる歴史的出来事に対する言及とします。

ハルマゲドンへの召集

地上に齎される新しい各々の裁きは、悔い改めない人の心にさらに厳しさを増していくだけです。あたか

も人類が創造主に憎しみを激しく持つに至るかのように、最後の戦争を求め熱心になります。その大いなる対決が永遠に誰がこの宇宙の君かを決定するでしょう。慈悲深い創造主か古い蛇である大反逆者か。彼らは異口同音に竜を選び獣のしるしを身に付けることを選び、なお、竜が天にいる創造主の恐ろしい災害から彼らを引き出してくれると信じているのです。しかし、彼らはこの災害の痛みをこれ以上耐えることは出来ないで、大いなるコンテストにしゃにむに突き進みます。

そして、もし、地上で苦悩している諸民族が、最後の対決を求めて熱心であるなら、獣はなおさう同じです。とりわけサタンは、長年この戦いの準備をしてきました。そして、いまや、彼の時が縮まり、決断の日は近いのです。

黙示録 16 章 12 節 第六の御使いが鉢を大ユーフラテス川にぶちまけた。すると、水は、日の出るほうから来る王たちに道を備えるために、かれてしまった。

第七の鉢の裁きはまた第七の災害とも呼ばれた（黙示録 15:1）。そして、第一に、一つの川が涸れる事がどうして災害と呼ばれるのか明らかではありません。歴史上この大災害は多くの河に突然襲ってきています。時々、人々はその結果どこかに移住していますが、全体として、世界はあまり悪い影響を受けなかった。他の災害はすべて世界中に甚大な結果を齎しますが、ユーフラテス川が乾くだけで、どうして他の災害と比較出来るほどの影響を齎し得たのでしょうか。

けだし、ユーフラテス川は、並みの川ではありません。その氾濫原（洪水の堆積物によって出来た川沿い

の平野）は大洪水後最初の都市（バベル）が出来た所で、預言者ダニエルの時代に、バビロンの王ネブカデネザルの首都があつた所でもありました。川の岸辺に、明らかにかつてないほどに素晴らしい新バビロンが建設されるでしょう。その都市は、大患難の短い間、前例のない世界全体に及ぶ支配をする獣の首都として役立ちます。その川は聖書の中で五回「大ユーフラテス川」と呼ばれており、事実、世界の大河の一つです。聖書時代には、ナイル川は長さで大きな点で知られている川の内ただ一つ比肩できる川でした。

記録のこの時点で、患難期は急速に、その頂点をなす終わりに近づいていきます。獣の王座、そして、おそらく大いなるバビロンのすべては、ちょうどまっくら闇に突入させられます。しかしながら、発電所がおそらくなお作動しているので、人工の照明がバビロン市を照らし続けることが出来ます。

新しいバビロンの水の供給は、古代バビロンの水の供給と同じように確かにユーフラテス川から取り入れています。古代には、ダムや運河による広大な水路網が、バビロン人の進歩した農業と都市の経済を維持するためにユーフラテスの水を利用したのです。現在のイラク国民は、イギリスとアメリカの援助を受けて、過去数十年広範囲にわたる水の供給、洪水制御、ユウフラテス川での水力発電など開発してきました。おまけにバビロン市再建に向けてかなり多く事業の開発にも用いられる事でしょう。こうして、獣の新しい壮大な主都も水の供給をもっぱらユーフラテスに頼っています。飲み水とその他の個人的用途のためだけでなく、発電装置の冷却水、空調装置系や工業生産工程、そして他の多くの絶対必要な働きの水をユーフラテス川により頼むのです。

したがって、ユーフラテス川の水が突然涸れ上がることは、その都市に致命的一撃となります。強力な発電所は間もなく閉鎖しないわけにはいかず、真つ暗な都市の照明はランプかローソクになるでしょう（黙示録

18章23節を見よ。なお利用できる貯蔵水は飲料水として生命維持という必要のために大切に使わなくてはなりません。

もちろん、ユーフラテス川の水の流量は、この第六の災害が実行される前に、既にかかなり減っています。患難期の前半の3年半の旱魃で川の水流はどこでも少なくなっているでしょう。その時、世界の新鮮な水を血に変える反応は、真水のままだ残すために必要な処置をするためには大変経費が必要になるでしょう。最終的に、第4の鉢の裁きすべてのものを焼き尽くす熱は、川や貯水池になお残っていた多くの水を確かに蒸発させてしまします。こうして、川の流れは既にひどく干上がっていました。

上述の状況すべては世界中総てに行き渡り、勿論、食糧供給と同じように水の供給は世界中どこでも枯渇します。しかし、今やほかの裁きが特に大河ユーフラテスを襲い、川は完全に干上がってしまします。確かに、川の突然の乾燥は、その支流をも同様に涸らし、そこに流れ込んでいる地下水脈をも涸らします。聖書はそれをはつきり述べていませんが、ユーフラテス川を襲った同じ自然現象がその姉妹のチグリス川をも同じように襲います。

こうして、既に一般物質の不足により重大な影響を受けている獣の素晴らしい新しい首都とその首都を維持するためにある周辺地域への水の供給は、速やかに消えてなくなります。世界の強力な中枢機関・誇り高ぶった罪人の壮大な主都は、暗闇と渇きで震え上がります。

第六の天使がユーフラテス川をどのようにして乾かすかは述べられていませんが、地殻構造上の力が関わっている可能性があります。患難期はそのまさに始から地震と噴火でも特色づけられます。次に続く裁きはすべての時に最も大きい地震が来ると決められています。全地域は歴史を通して地殻構造上不安定になっ

ます。地球の動きは地下深い所にある空洞や導管が開き地表の水を干上^{（かんじょう）}がらせると考えられます。他の可能性は猛烈な局所の風で蒸発を加速します。これらのまたは他の既知の現象が含まれているかどうか、第六の災害をもたらす天使は、確かに、突然傲慢なユーフラテスを干上がらせ乾燥させる如何なる過程をも導くことが出来るのです。

一つの他の興味をそそる可能性があります。ユーフラテスカワトチギリス川の両者はとけつつある、アララテ山の高い斜面で又はその近く、結局、アララテ山の 17000 フィートの山頂近くにある雪や氷冠（山頂などをおおう万年雪）にその源があります。アララトの地域（聖書にあるアルメニアと同じ）は、高く凸凹した地帯で、本質的に変化しやすい、火成岩から成り、冬の間は雪で覆われています。最も高い山、アララテ山は万年雪で覆われています。それは夏季にほんの僅か部分的に融けます。高地の融けつつある雪はユーフラテスーチギリス流域に最も多くの水を供給します。即ち、世界で最も尊敬に値する川は、大洪水後人類が誕生したのと同じ地域にその起源があります。偉大なアララテ山地域、そこにノアと動物は箱船から上陸した。しかしこれらの雪と氷は、大かんばつと第 4 の鉢の裁きでの特に太陽の激しい熱によるグリーンランドとアメリカの巨大な大氷原の融解と共に融けます。その源に水がなくなってしまったから、本質的にすっかり川が干上がるのです。

ノアの方舟が着地したのはここアララテ山です。ほぼ 15000 フィートの高さにある一定不変の氷河に、古代のまた近代の多くの探検家が長い熱い夏の終わりに山頂をおおう万年雪から飛び出ている箱船の船首をチラツと見たと主張しているのはここです。けれども、証拠書類と体系的な測量によってこれらの報告が本当であることを証明しようと企画した科学的調査団の遠征は失敗しました。かれらが調査したどの夏もあり暑くなくて氷が融けるのに十分ではなかった。

創造主は戦略上最善の時のためにこの発見を引き止めておられるのかも知れません。前ではなく、少なくともこの第六の災害の時に、山頂を覆う万年雪が永久に融けて箱船が現れるでしょう。そして、創造主の真理を示すと共に、創造主の最高の権力を持つ裁きに対する偉大な証拠としてまさに終わりの日にその役割を果たします。

しかし、東の王たちに対するこの不可解な言及は何でしょうか。「地の王たち」については黙示録に九回言及されていますが、この十二節は「東の王たち」に対する唯一の言及です。ダニエルの預言に、王を悩ます「東からと北からの知らせが」という謎のような言及があります。その王とは明らかに黙示録に獣として記されている者と同じです（黙示録 11 章 4 節）。けれども、ダニエルにある前後関係は、この出来事を患難期のより前で、王がなお彼の世界帝国の征服と統合の過程にあった時です。

前に検討したように（6 章を見よ）、獣と呼ばれる専制的な王の登場に貢献する主な要因は、患難期の初めのころ、ゴゲによって建て上げられた北の連合軍の壊滅的敗北であった。ロシアとアラブ軍の大連合は、大量に殺された。そして、ヨーロッパと西側諸国に彼ら自身の力を統合し固める期会を与えるのです。これらどこから指導者として獣が出現します。こうして、特に、ダニエル、エゼキエルや黙示録にその輪郭が述べられている様に、この点に向けて、政治的軍事的に最大の発展が、北、または南、または西の諸国に集中するように思われる。

しかし、東にも偉大な国々―中国、日本、インドやその他の多くの国々があります。これらは世界の他の地域にある諸国と全く同じように反キリスト教です。長い年月、彼らは宗教（仏教、儒教、ヒンズー教そ

の他) によって支配されてきました。それらの宗教は基本的に進化論に立つ宗教です。すなわち、これ等の宗教は皆すべてのものを創造された超自然的、全能の、人格的創造主という概念のない永遠の宇宙を心に描いています。彼らの強調点はただ現在の行為にあるのです。彼らにとって、歴史は、一般に始まりも終わりもない永久に続く循環から成っているというものです。

これらの汎神論的組織と関連付けて考えられるのは、常に精霊礼拝であったし、現在もそうです。これ等の霊が祖先の霊として、または樹かその他の自然界にある物として理解されようと、いずれにせよこのような礼拝は、実際には悪霊に対する礼拝なのです。こうして、このような礼拝は、通常また偶像崇拜と結合しています。この東洋の宗教は、特定の時と場所に当然相応しいように特別な形を取つていようと、それは本質的に創造主から遣わされた預言者たちが絶えず非難した古代の偶像崇拜と同じです。進化論、汎神論、多神論、偶像崇拜、占星術、精霊崇拜的(アニミズム的ヒューマニズム)の巨大な複合体から成つていて、バベルでニムロデによって取り入れられた原始宗教の変形に過ぎず、言葉の乱れとそれに続くバベルから世界中への離散によって世界中に広められた。

その本来の性質からして、悪魔のような影響を持ち、ニムロデ的宗教の熱狂的信者の統制に力を貸します。それにも拘らず、何世紀にもわたって、多くの人がこれらの異教の宗教からキリストを信じるようになってきました。福音の種が沢山蒔かれていて、非常に大きい魂の刈入れが患難期を通して行われ、異教からキリストへ彼らを集める事が可能になるのです。

けれども、改心しない人々はかつてないほどに悪霊との盈虚と操縦をますます受けるようになり、時が来ると速やかにハルマゲドンへと悪霊に導かれていきます。特に東の王たち、それから概して地の王たちすべて

では、彼らに追従する群衆を狭いイスラエルに集めます。そこで彼らは最後に死に至る闘争となるキリストに従う天の軍勢に出会うのです。

そして、それは東の王たちです。引き出されるアジアの人口数十億をもつ東の王たちの軍隊は、数の上では最も大きいのです。間もなく大群衆が、中国と日本から、インドとインドネシアから、マレーシアとベトナムから、昔のバビロンに流れ込み、ユーフラテス川を横切り、地獄の炎に群がる蛾のようにハルマゲドンに引き寄せられます。

勿論、これら東の大集団がユーフラテスを横切る前には川が干上がる必要はありません。恐らくキツプリングの東西の古代の障壁に遂に穴がかけられる象徴として以外には川が干上がる必要はないのです。ユーフラテス川はアッシリヤとバビロンの古代の境界でしたそして、使徒ヨハネの時代、ローマ帝国の東の境界でした。それはまたアブラハムに約束された土地の東の境界でもあります(創世記15:18)。

象徴として以外、それを横切るのに川の水を干上がらせる必要はありません。古代の軍隊はユーフラテスを何回も横切つたし、近代の自動車化された軍隊は、川に架けられた多くの橋々を容易に横切ることができ

それでは、東の王たちに道を備えるためになぜ川が干上がるのでしょうか?これは不思議な宣言で、この時点で教義的説明は出来ません。しかしながらこのユーフラテスに対する言及とユーフラテスについて新約聖書の他のところにある唯一の記載、黙示録9章14節にある同程度に不可解な声明との間に結びつきがあるとも考えられます。そこに第6のラッパの裁きが4人の悪しき天使と20億の悪霊につかれた馬人間の大群が三分の一の人を殺すためにユーフラテスから解き放たれた。4年後、ここに第6の鉢の裁きが、ユーフ

ラテス川をすっかり干上がらせてしまいます。そして、彼らの最後の運命の地ハルマゲドンの大平原に急ぐ大勢の騎馬隊の人々に道を備えているのです。

ユーフラテスは長い間、恐らくバベルでの最初の離散以降の慣習の日付で、東と西の境と見做されてきているのです。確かにそこに新しいバビロンと素晴らしい世界首都を建設すると言うこの考えは大いに強められます。けれども、特に、これらの患難期に極東の国々の霊を鎮める大衆たちmにユーフラテスの最も恐ろしい側面は、4年前にユーフラテスから群がり出た大勢の恐ろしい致命的な馬人間の記憶です。特に、東方の人口稠密な都市にいる獅子の頭サソリの尾を持つこれら馬の致命的損害が、筆舌に尽くしがたいほど激しく、迷信的雰囲気をもって大河を覆っていたに違いありません。その迷信的雰囲気は東から西に行こうとする人を引き返らせる（の前に立ちほだかる）鉄のカーテンよりさらに効果的なのです。

しかし、突然偉大な川が干上がり、そして川底の露出した砂や岩は、馬人間やどんな生き物も全くないことを示すのです。あたかも川自体がハルマゲドンに向かって川を急いで横切つて急いで行くように招いているように思われます。人を餌食にしようとこつそり近づく長い間幽閉されていた悪霊たちは最早いません。地獄にいるすべてのレギオンたちは、キリストが間もなく現われる地点ずっと前から預言されていた所に集まるために待機していて、彼らは、彼らが人間の中から集めることのできる援軍総てを必要としているのです。獣の焼き印は人々の手か額に押されていて、竜がシーと音を立てる時、彼らは従わなければなりません。

黙示録 16 章 13 節 また、私は竜の口と、獣の口と、にせ預言者の口とから、かえるような汚れた霊

どもが三つ出て来るのを見た。

ヨハネがユーフラテス川の急激な変化を見つめている時、どういうわけか、彼の注意は、背後にある暗い影を宿すバビロンに向けられます。そこに、驚くべき会議が、ろうそくに照らされた首都の奥まった会議室で行われています。真夜中の会合に、二人の獣―主権者とその預言者―が、見慣れない訪問者の話に耳を傾けています。これこそバビロンの本当の君主で（イザヤ 14:4）、その方が獣に王座を与えた方です（黙示録 13:2）。この邪悪な霊が、老巧なサタン（明けの明星）で、長年にわたり光りの天使として人前に登場した（Ⅱコリント 11:14）が、今や巨大な竜としてヨハネに簡単に判るのです。

会議は結論に達します。状況は絶望的になって来ており、今進行中の出来事の進路を変更することは出来ない。聖くない三位一体は「忠実また真実」（黙示録 10:11）と呼ばれる方と約束しており、その方は待つことをしない。長年にわたる闘争が間もなく決着が付けられるはずで、彼らが少しでも勝つ希望を持てるとすれば、彼らはその戦いのためにあらゆる可能性のあるう補充兵を集めなくてはならない。

異口同音に彼らは語る、そしてすべての闇の支配と権力は、バビロンの闇から世界の国々に広がります。闇が身動きの取れない状況になった途端、突然蛙の騒々しい鳴き声が夜気を貫通してあらゆる方向に達します。まさにこれら悪しき……蛙のように穢れた、醜い、騒々しい……三つの霊が、より重要でない数えきれない大勢の霊を世界中に出て行かせ、闇のとばりに包まれた世界に、耳障りな声で彼らのメッセージを伝えます。彼らの「悪霊の教え」を持つこれらの「惑わす霊」（Ⅰテモテ 4:1）が、彼らがもう一度理想の時代を齎すなどと偽りとごまかしを広げます。そこで、地の王たちは、彼らの麻薬でゆがめられた見方と創造主の災

害からの痛みで既に分別を失っていて、もう一度、彼らのだましごとに耳を傾けます。

黙示録 16 章 14 節 彼らはしるしを行つ悪霊どもの霊である。彼らは全世界の王たちのところに出て行く。万物の支配者である神・創造主の大いなる日の戦いに備えて、彼らを集めるためである。

これらの悪霊どもは、もちろん、彼ら自身のからだを持っていませんが、悪霊つきの人々の声を用いることは彼らにとつて容易（たやす）いことです。彼らはこれらの悪霊付の人々のからだを患難期の間（とその前も）支配してきているのです。終わりの日に悪影響を及ぼす大勢の「偽預言者たち」（マタイ 24:24）と「偽教師」たち（Ⅱペテロ）は、喜んで、「惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ」（Ⅰテモテ 7:4-1）、彼らに乗り移った悪霊のために彼らの声、知性、肉体の力を貸し与えます。

それだけでなく、彼らが説得しようとしているこれら地の王たちや裁き人たちからの質問又は抵抗にもし彼らが出会うならば、彼らは彼らに対する信用性を確立するために、彼らを代表する瘤、獣と偽預言者の克服しがたい力を持つことを人々に保証するために彼らは奇跡を行います。主イエス・キリストが、御自身で予言されたように、彼らは、「できれば選民を惑わそうとして、しるしや不思議なことをして見せます」（マルコ 13:22）。全世界の国々の王たちや大統領や元帥たちがかつて納得させられ、彼らは人々をもまた説得する上で彼ら自身の支持者層の中で適切と思われる手段を順次企てます。この中で、彼らは、いたるところに矢継ぎ早に増えている驚くべきことを見せる魔術師たちと呪文で縛る「預言者たち」に助けられます。そして、災害の下で苦しんでいて、真の創造主に対し苦い思いを持っている人々は、認めるに難くありません。群れ

を成して彼らは徴兵に応じ戦争に行く準備をします。

これらの邪悪な霊たちが喜んで託宣をする悪霊の群れを通して伝えるメッセージは何でしょうか。それはこれです。「諸国の民の間で、こう叫べ。聖戦をふれよ。勇士たちを奮い立たせよ。すべての戦士たちを集めて上らせよ。あなたがたの鋤を剣に、あなたがたのかまを槍に、打ち直せ。弱い者に『私は勇士だ』と言わせよ。回りのすべての国々よ。急いで来て、そこに集まれ。——【主】よ。あなたの勇士たちを下してください——諸国の民は起き上がり、ヨシヤパテの谷に上つて来い。わたしが、そこで、回りのすべての国々をさばくために、さばきの座に着くからだ。」（ヨエル 3:9-12）。

それで、彼らは、アフリカ、アジア、ヨーロッパとアメリカから流れ出てエルサレムに向けて、行進し始めます。諸国の軍隊は、彼らの自由になる軍のあらゆる輸送手段を用いて、航空機で、行軍して、騎馬で艦船を用いてやってきます。しかし、燃料と船と飛行機は乏しいので、訓練を受けていない大勢の補充兵たちは自分の出来る方法で行きます。自動車、トラック、バスで、ハイウェイをガソリンタンクが空になるまでのろのろ進みます（訓練や演習などの軍事行動の多くは、水不足の危機的状況と猛暑のためにおそらく一時中止されます）。馬やロバやラクダが軍用に押収されて、多くの者が利用できるものとしてこのような動物に乗ります。歩かなければならない人々……彼らにとつて幸運なことですが……は置き去りにされるが、間もなく大群衆となります。彼らはエルサレムの東にある大きな一連の平野と谷に集まっている、職業戦士や訓練を受けていない怒りたけた市民から成る大群衆です。やけになって、彼らはしきりに全能の創造主と戦おうとしています。そして、キリストと天の軍勢がすぐにエルサレムの近くの地上に来ることを知っており、キリストは彼らの恐ろしい苦悩の原因である方です。救い主としてのキリストを拒否した彼らの唯一の望み

はキリストが彼らの裁判官になる前にキリストを滅ぼすことです。確かに、彼らは人の手になる武器は十分であることを直感していますが、彼らが礼拝している獣や竜（黙示録13…4）と彼らに従う大勢の悪霊の集団の超人間的力を信頼しています。

黙示録16章15節

見よ。わたしは盗人のように来る。目をさまして、身に着物を着け、裸で歩く恥を人に見られないようにする者は幸いである

16節は明らかに14節の主題の続きですから、15節の聖なる約束の挿入は最初場違いに思われます。そして、前の文章とも後ろの文章の文脈ともなら直接の関係がないのです。それはハルマゲドンへの途上にある悪霊に導かれた大勢の男女に当てたものでないことは明らかです。そして、悪魔であろうと人であろうと彼らの指導者に当てたものではありません。それは明らかにキリスト信者に当てられています。

福音書と使徒の書簡（マタイ24勝42…44節；ルカ12章35…40節；一テサロニケ5…2…4；IIペテロ3…10；黙示録3…3）に同様の約束・キリストがすぐに帰ってくることに、そのために準備し目を覚ましておくことの必要性についての言及があります。けれどこの時点で携挙は既に過ぎたことです。さらに、諸国の民を裁くためにキリストが地上に変えられるのは「盗人のように」してではありません。なぜなら、彼らは皆今や来臨を待っており、キリストが来られる時『すべての目が彼を見る』（黙示録1…7）からです。

こうして、この特別な文脈にある特別な約束について無比の重大なことがあります。

獣のしるしを拒否して、どうかして首尾よく生き残ることが出来たユダヤ人と異邦人の両者に、この時点で明らかになお多くの問題、おそらく、エルサレム近郊の荒野に向かつてユダヤ人の残存者が逃げるのと幾分類似して、荒野のいろいろな避難所に逃げている人々がいるのです。これらの人の多くはキリストを救い主として信頼しており、他の人々（特にユダヤ人たち）は新生したクリスチャンになっていないかもしれませんが、まことの創造主を信じており、それ故に獣を礼拝しその像に頭を下げるのを拒否します。

おそらく主がこの時話している対象は、このような人々です。彼らは天使の怒りの鉢の災害に共に与っているけれども、獣の手下（エージェント）が彼らを見出し殺そうと探しているからだけでなく、イスラエルの地に創造主と戦うために急いでいる群衆の奇妙な悪魔的憤怒にであつても、彼らは恐れることはありません。彼ら自身、主からの特別な指示と主からの慰めを確信していて、彼らの立場にとどまり続けるようにお互いを勇気づけます。

主は彼らを忘れません。主は彼らをすさまじい災害から守り、必要を補います。しかし、彼らは主が諸国を裁くために力と栄光のうちに帰って来る時、彼らに何が起こるかを知りたいかもしれません。そこで、創造主は、天からこの時点で親切に特別なメッセージを彼らに送ります。丁度、キリストが患難期の前に聖徒たちにしたように、キリストは、また彼らの所に帰ってきます。これら初期の聖徒たちにしたように、キリストは、思いがけないときに盗人の様にやって来ます。

それゆえ、彼らは、着物を脱いでいて服に無関心でいることはなく、旅のために着物を着けるように、目を覚まし、準備してはなりません。着物を何一つつける時間さえなく、突然、旅に出るように強いられて、ひどく恥ずかしい思いをさせられるのと同様に、キリストが聖徒たちのために用意しているきれい

な麻の義の代わりに、いわば、人がいい加減で気ままで不潔な襤褸を着ている時、聖なるキリストの御前に移さるかのようです。「そこで、子どもたちよ。キリストのうちにとどまっていなさい。それは、キリストが現れるとき、私たちが信頼を持ち、その来臨のときに、御前で恥じ入るということのないためです。」（「ヨハネ2…28」）

この特別な来臨は、死んだ信者の甦りや生きている聖徒の賛美と同様に、事実上、もう一つの携挙であるか否かははっきりしない。おそらく、主が地上に帰って来る直前に聖なる都に生きている彼らの兄弟たちに加わるために生きている者の移し替えとなるでしょう。「いけにえをもってわたしと契約を結んだ／わが聖徒をわたしのもとに集めよ」と。天は神の義をあらわす」（詩篇50:5、6）

黙示録16章16節 こうして彼らは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる所に王たちを集めた。

非常に大きな最後の地震

悪い霊たちが嘘を言い広めて国々を丸め込んでいる間に、大勢の人々がハルマゲドンに向け急遽旅を始めます。地に注がれるのを待っている怒りの鉢がなお一つありました。第七の災害を地に与える天使が裁きの

谷にこれらの大衆が到着するのを待っており、それから、最期の鉢に盛られた恐ろしい飲み物を地に注ぎかけるはずです。

黙示録16章17節 第七の御使いが鉢を空中にぶちまけた。すると、大きな声が御座を出て、聖所の中から出て来て、「事は成就した。」と言った。

ここに七つの災害のうち最後で最大の災害があります。鉢はそれぞれ地上に、海に、水路に、太陽に、獣の王座にそして大きな川ユーフラテスに注がれてきました。この鉢は地球を取り巻く大気に向けて注ぎ込まれ、その中味は地球のあらゆる所に散らされます。

反逆する世に対する創造主の最高で決定的意味を持つ最後の攻撃は、天からの大きな証言で終わると保証されています。声が宮から発せられ、続いて創造主の御座から来ます。ヨハネは天のいろいろな所からの大きな声を何回も聞いていましたが、天の宮にある御座から直接出たと言われている声は、これが初めてで、それは創造主の声以外の何者でもなく、その御声から迸り出る宣告は最も意義深いものです。

「事は成就した」と主は言われます。これが主が来られる前に地上に訪れることになっている最後の裁きです。地球はキリストの再臨とすばらしい千年王国の準備が完全に整います。このことばはヘブル書4章3節に「みわざは創世の初めから、もう終わっているのです。」とあるのと同じです。丁度創造主が六日のうち（創世記2:1-3）にすべてのものを創り組み立てられて御業を完成されたように、いま、創造主は完全に地とその自然界の仕組みを清めかえる業を終わらせます。こうして、すぐにも始まるうとしている王国でのすばら

しい目的を成就することが出来ます。

それにもかかわらず、創造主は次のようなアナウンスをしています。美しく完全にデザインされた千年期の世界でさえ、なお不完全なのです。そこに住む人々はなお罪人です。それゆえ、千年期の終わりにもう一度罪の清めがなされなくてはなりません。キリストは新しい地と新しい天を造りその上でもう一度最後に「事は成就した」(黙示録 21:6)との宣言をされました

しかし、今、わたしたちはこの最後の災害がなぜこのような創造主の力ある業を成し遂げることになるのかを学ばなくてはなりません。すでに地球にははなはだしい変化があります。陸地と海、海生生物と植物、大気と太陽と月でさえ、すべてが大いに影響を受けていますが、完成されるために必要なもう一つの大きな変化が残されています。

黙示録 16 章 18 節　すると、いなずまと声と雷鳴があり、大きな地震があった。この地震は人間が地上に住んで以来、かつてなかったほどのもので、それほどに大きな、強い地震であった。

ヨハネは、三回「声と雷鳴といわずま」(黙示録 4:5、8:5、11:19)を、丁度封印の裁きの前とラツパの裁きの前とラツパの裁きと鉢の裁きの各々で、天で起こるのを聞いていました。最後の二回は、地上に地震も起こりました。こうして、天のみ座で三重のどよめき―大きな声、いなずま、雷鳴で七つの裁きが、いわば各々三組に結び合わせられているのを見ます。言ってみれば、裁きの三セットが地上に起こった大地震で終わりを迎えたのです。

しかし、この最後の地震は、前触れも付随するものもなく起こったのです！有史以来、ノアの大洪水が終わって起こった並外れの地殻運動以来、「さまざまの所で」地震がありました(詩篇 104:5-9)。地球はときどき圧力と不安定な状態に、あちこちで置かれています。この不安定な均衡が、時には人とその働きを壊滅する大きな地球の動きを生じます。最初の洪水は世界的規模の洪水でした。その後、数世紀にわたって、さまざまな局地的洪水が続きました。反対に、数世紀にわたってさまざまな局地的地震があり、全世界的地震へと進み頂点に達し終わりを迎えます。洪水も地震もそれらのすべては、ノアの洪水が引き起こした地形と大気に及ぼした変化を伴ったが、結局、最初の大洪水にすべては帰するのです。

地球の自然管理体制を悪化させる変化によってもたらされたすべての結果は、患難期の間に何とか修正されなくてはなりません。こうして、美しい洪水前の世界が千年期には回復されるのです。第七の鉢の地球全体に及ぶ強力な地震は、この環境をもたらす最後の出来事です。

患難期の七年を通して、地球環境はすでに変わり、大激動を来たしていました。第六の封印は大地震を解き放って、明らかに地球のすべての地殻を引き裂く結果を齎しました(黙示録 6:12-14)。はじめに起こった地震の後、ラツパの音が鳴り響き(黙示録 8:5)、宇宙空間から大きな物体が地上に爆射された(黙示録 8:7、10)【訳者注：これは温存されていた原子力の破壊兵器の投下とそれに続いて起こる災害に似ている】。

患難期の中頃にもう一つ大きな地震がありました(黙示録 11:13、19:12、16)。

しかし、この最後の地震のような地震は一度もなかった。昔の預言者がこのような日が来ることを預言していた。「まことに、万軍の主はこう仰せられる。しばらくして、もう一度、わたしは天と地と、海と陸とを揺り動かす。わたしは、すべての国々を揺り動かす。すべての国々の宝物がもたらされ、わたしはこの宮を

栄光で満ちた。万軍の主は仰せられる。」（ハガイ 2:6, 7）。「地上の住民よ。恐れと、落とし穴と、わなどがあなたにかけられ、．．．天の窓が開かれ、地の基が震えるからだ。地は裂けに裂け、地はゆるぎにゆるぎ、地はよろめきによるめく。地は酔いどれのように、ふらふら、ふらつき、仮小屋のように揺り動かされる。そのそむきの罪が地の上に重くのしかかり、地は倒れて、再び起き上がれない。その日、主は天では天の大軍を、地では地上の王たちを罰せられる。」（イザヤ 24:17, 21）。「主はシオンから叫び、エルサレムから声を出される。天も地も震える。だが、主は、その民の避け所、イスラエルの子らのとりでである。」（ヨエル 3:16）。

もちろん、この大地震はすべての国の地形を変えるだけではなく、主として、地上の誇り高い都市すべてを滅ぼします。特に、すべての都市のうちで最もすばらしい力強いバビロンが崩壊するのです。

黙示録 16 章 19 節 また、あの大きな都は三つに裂かれ、諸国の民の町々は倒れた。そして、大バビロンは、創造主の前に覚えられて、創造主の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。

地表を粉々に打ち砕く前例の無い地球全体に及ぶ地震という不慮の災害の下、主な都市すべては地に叩きつけられます。すでに検討したように、大陸の沿岸に沿って立つ世界の大都市の多くは、第四の鉢の裁きである炎熱の太陽の下、山頂を覆った万年雪が急速に解け、それに伴って上昇した海面の水位のためすでに水浸しになってしまったと言ってもよいのです。いまや高地にある都市も滅びます。シカゴとメキシコ市、カラカスとサンパウロ、ヨハネスブルクとカイロ、北京とニューデリー、モスクワ、ベルリンとパリなど各々の大陸にあるすべての都市は倒壊します。

地震は「大きな都」をさえ襲い、三つに分けます。しかし、すべての異邦の国々の都市のように、この都は破壊されません。その都の運命は、バビロンとは区別されており（バビロンは異邦人の他の都市のように完全に壊滅されます黙示録 18:21 を参照）、その大きな都はエルサレム「聖なる都」そのものというのが必然的結論なのです。実際に、エルサレムは、黙示録 11 章 8 節では「大きな都」と呼ばれ、また、新しいエルサレムは黙示録 21 章 10 節で「聖なる都」と呼ばれています。

地球の大都市すべてのうちエルサレムだけが、このように、患難期の終わりに起こる地震で破壊されないで残るのです。エルサレムは永遠の都市で、現在の形で地球が続く限り存在し続け、最後に、新しい地球で新しいエルサレムに置き換えられます。「ダビデがこう言ったからである。『イスラエルの創造主、主は、御民に安息を与え、とこしえまでもエルサレムに住まわれる。』（歴代誌 23:25）」「主に信頼する人々はシオンの山のようだ。ゆるぐことなく、とこしえにながらえる。」（詩篇 125:1）「わたしは足なえを、残りの者とし、遠くへ移された者を、強い国民とする。主はシオンの山で、今よりとこしえまで、彼らの王となる。」（ミカ 4:7）

しかし、エルサレムでさえ、大きな地震の直撃を受けた時、重大な変化を来したはずで、主が出て行ってエルサレムに対して集まった人々と戦うと約束されたすぐ後、ゼカリヤは「その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリブ山の上に立つ。オリブ山は、その真中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。」（ゼカリヤ 14:4）と言っています。

このように、大きな都は地震で三つに分割されて、その二つは、明らかに、オリブ山（北）とオリブ山（南）になります。おそらく、三つ目はシオン山自体です。シオンの山は、今は、キデロンの谷でオリブ山から分けられています。キデロンの小さな川は曲がりくねって死海に下って行きます。オリブ山の裂け目

はキデロンで止まるように思われます。ゼカリヤは新しい谷がシオン山をも分けることを意味していないからです。事実、聖書はシオンの山(シオンの山の複雑な丘の上に古代エルサレム市の大部分が建てられていた)は永遠に(現地球が続く限り)立ち続けると力強く主張しているようです。

しかし、ゼカリヤは大変面白い預言をしています「その日には、エルサレムから湧き水が流れ出て、その半分は東の海に、他の半分は西の海に流れ、夏にも冬にも、それは流れる。」(ゼカリヤ14:8)。たとえば、シオンの山が大地震で何の障害も受けなくとも、なぜか大きな河を生ずる巨大な自噴泉が開かれます。これが明らかに死海に下る千年期の宮から流れ出る水の源になり、塩水湖(訳者注:死海)の水を中和します。

エルサレムからの水は「前の海」と「後の海」に流れます。これらの一つは明らかに死海です。もう一つはガリラヤ湖か地中海に違いありません。宮との関連で、地中海は西にあり、死海は東にあるので、「後の海」の方が当然死海となります。「前の方」は「後方」の正反対を意味しています。エルサレムは本質的に地中海と死海を分ける中心にあるので、東と西の海に流れ込むのはシオンの山にある不思議な新しい泉から流れ出る川というのが理に適っています。

地震の断層が穴を穿つすばらしい自噴泉の透水層(地下水を保存する砂・じりり・多孔性の岩などからなる層)が何処にあるかその位置、エルサレムにこんなにおびたらしい量の水を供給するために、そこで加圧された水がどのようにして放出されるのかは分かりません。しかしながら、シオンに水を運ぶためにどの地下水路が地震によって穿かれなくてはならないか、その位置をご存知なのは創造主ご自身です。

こうして、強力な地震で他の都市が破壊されたのに、創造主の聖なる都はより美しくかつての位置を完全に保っているのです。「高嶺の麗しさは、全地の喜び。北の端なるシオンの山は大王の都」(詩篇48:2)とあ

る通りです。

しかしながら、大いなるバビロンの運命はまったく異なっています。その他の民族の都市は明らかに滅び地面に横たわっていますが、もしかすると、千年期を通して更新でき再建できるかも知れません。しかし、バビロンはそうはなりません。バビロンは創造主の特別な怒りの対象そのものです。すべて人に対する教育の対象として永遠に保たれるようにしなければなりません。バビロンは創造主の怒りによって踏みつけられた葡萄から出来た葡萄酒を飲ませられなくてはなりません(黙示録14:18-20の検討を見よ)。そして、乱暴に投げ出され、まったく何も残さないで解体されるのです(黙示録18:21)。

しかし、大いなるバビロンの問題は非常に大切なので、ヨハネはその物語すべてを黙示録の二つの章すべてを割いて記録するように導かれました。17章でこの問題を取り扱います。

黙示録16章20節 島はすべて逃げ去り、山々は見えなくなつた。

六つの封印の裁きの下(黙示録6:12-14)、地震は非常に大きかったので、「すべての山や島がその場所から移された」のです。地殻は非常に不安定になったので、少なくとも一時、表土の深いところに地滑りを起こしました。The earth's crust become so unstable that, for a time at least, it was slipping across the deep mantle. それに伴って相対的な動きが起こり、地上のある所にいた人々は「天は巻物が巻かれるように消えてなくなり」とでも言うように見えたことでしょう。全世界の荒廃はひどいものでした。

それにも拘らず、山々や島々(海面下の山々をさす)は、地球の動きが止まった時、なお存在していました。

地形はすっかり変わっていました。高い山々の多くは崩れ去りました。患難時代に長引いた旱魃で河川や湖沼や大洋でさえも乾燥脱水が加速され、表層下の地すべりをさらに助長するのに役立ち、そのため海中の沈殿物は数千年の間で最も速い速度で堆積し続けます。高地は切り崩され深海底の盆地は一杯に詰め込まれ、地形は急速に平坦に広げられていきました。

しかし、いまや、この最後の災害による急激な変化だけで、何とひどい大変動をもたらすことでしょう。以前、山々と島々はただその場所から動いてしまっただけでした。いまや、「島々は逃げ去り、山々は見出えなくなつた。」花崗岩、石灰岩、砂岩の巨大な塊はばらばらになり、海の底に移されて、世界の大きな山々と島々は消え去つた。逆に、深い海洋の海盆は埋め尽くされ、こうして、海面はノアの洪水前にあつた高さに回復される。しかも、海の水の大部分は対流圏（地表から10〜20kmの所）の上上げられて創造の時点に戻つたかのように水蒸気の巨大な天蓋を繰り広げます（創世記1…7）。

これらの変化は、ハルマゲドンからエドムに密集しエルサレムに対して隊列を組んだものすごい軍隊にとつても、またすべての大陸になお散らされている大衆にとつても、地上にいる人々にとつても、実際に精神的ショックを齎す変化でした。それにもかかわらず、地上におけるこれらすべての変化による新しい結果は、すぐにも来る千年期の美しい環境を準備する改善的变化であつたのです。

イザヤの偉大な預言は成就されつつあつた。「すべての谷は埋め立てられ、すべての山や丘は低くなる。盛り上がった地は平地に、険しい地は平野となる。このようにして、主の栄光が現わされると、すべての者が共にこれを見る。主の口が語られたからだ。」（イザヤ40…45）。

原初に創造された世界のような穏やかに起伏している地形が回復されるでしょう。そこにはもはや人を寄せ付けない人の住めない山脈や砂漠や万年雪はありません。千年期の自然環境は、大部分洪水前の環境の復興となるでしょう。このことは20章でさらにもっと徹底的に検討します。将来この世に住む人々にとって大きな利益になるとはいえ、これら地球の異変は現在の住民にとって言い尽くしがたい恐怖となるでしょう。

黙示録16章21節 また、一タラントほどの大きな雹が、人々の上に天から降って来た。人々は、この雹の災害のため、創造主にけがしごとを言った。その災害が非常に激しかったからである。

前例の無い地震の最もひどい面、その渦中にある人々から引き出される不敬な言動の連発は、空からあられのように落ちてくる物凄い雹です。この雹は通常のあられのような雹ではありません。つまり、氷は、大気圏の嵐で起こる激しい上昇流で生じます。チャラザと言うギリシャ語は、ただ落下するはつきり分からな何かを意味します。このことばは新約聖書では黙示録（8…7、11…19）だけで用いられ、空から落ちてくる物体何にでも当てて用いることが出来ます。この特別の雹は、「石」と言うことばが用いられていることによって特定されます。ギリシャ語のリソスは常に何処でも本物の岩を構成している物質にだけ用いられているのです。

それゆえ、その恐ろしい光景は信じられない恐怖と大虐殺をもたらします。地球の激しい運動は、必然的に、すさまじい火山噴火を伴い広範に灰だけではなく大きな岩石の破片を撒き散らします。唯一つの適切な描写は空から人に襲い掛かった雹のような大きな岩の落下となるでしょう。

これらの岩石は単なる小石ではなく、丸い石です。各々の平均の重さは1タラント（約35キログラム）です。タラントは古代の何か価値ある重さの単位で、常に35キログラムかそれ以上の重さをさします。それゆえ、空前絶後の最大の地震と共に、空から土砂降りのように降ってきた35キログラム以上の丸石の雹く山々はくずれ、大きな裂け目が開き、地殻構造はこなごなになり、海岸を襲う津波、何処もかしこも荒廃を来たと想像されます。この災害は実際に「非常に激しい」のです。

もちろん、雨霰のように落ちてくる石が、キリストとキリストと共に地上に帰還する聖徒たちと戦おうとして集まった何百万の人々の上に特に激しく降り注いだ可能性があります。このゆえに、痛烈な非難の叫びと穢しごとを発するだけで逃れる道はありません。ハルマゲドンからエドムに至る谷と平地の複雑な地形に一列に並んだ軍隊が大きな運命に翻弄されて共に野営していた。彼らは天からの衝撃に対してまったく打つ手がないのです。

これが黙示録14章19〜20節の生き生きとした表現の意味かもしれません。そこで、これらの集団は創造主の大きいなる怒りの酒船に投げ込まれると言われています。血が馬のくつわに流れるまでエルサレムの外で踏みつけられるのです。おそらく、人々と乗用馬が葡萄で、丸石は踏みつける足でしょう。地球への衝撃に起因する大気の高気圧と低気圧の強烈に繰り返されるうねりがまた、血管の破裂と血の溢れ出るのに貢献します。その詳細がどうであろうと、その出来事のこれ以上ありえない恐怖は想像を絶するものです。創造主は長い間じっとこらえています。主の日は来ます。「あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。」（詩篇2:9）のです。